

## 国語の教科書の使い方

国語の教科書は、領域や言語文化など、学習内容によって紙面の様子が異なります。主な学習内容から、それぞれの紙面の性質に応じた教科書の効果的な活用方法を紹介します。

国語科の教科書は、毎時の学習内容の指標となる計画書というより、単元のまとまりをもった教材集と言えます。それは国語科の学習が、母語を対象とした学びであり、日常的に言葉を使う子どもたちの実態抜きには、計画し得ないからです。

教科書が確定的な学習計画を提示していないからこそ、授業が言葉の学びとなるよう、毎時の目標や活動を教師が把握しておくことが不可欠です。それは、子どもたちが、①どのような活動を通して、②何に気づき、③何を学ぶのか、ということです。教科書は、いずれの段階でも最も効率的なツールと言えます。

だからこそ、単元全体を扉ページから最後まで確認する必要があります。子どもたちに身に付けさせたい力を明確にし、教師が教科書を基に単元を構築していくこととなります。同時に、評価規準を設定し、何をどのタイミングで評価するのか、評価に関する計画を事前に検討しておきましょう。

また、子どもたちが学習に対して主体的に取り組むためには、子どもたち自身が学習に対する意識を高めることが重要です。教科書は、課題をつかんだり、学習を振り返ったりすることを促すために用いることができます。単元の冒頭や終末はもちろんのこと、学習が進むに応じてその機会をつくとよいでしょう。



### 1. 話すこと・聞くこと、及び、書くこと

学習活動の例示がそのまま学習内容になっています。教科書を確認することで、子どもたち自身が学習活動を捉え、見通しをもちながら学習を進めることができます。話し合い内での発話のやり取りや、作文例といった想定を共有することで、学習のゴールイメージを明確になります。

ただし、教科書が設定する話題や活動対象、状況は例示であるため、子どもたちや学校、地域の実態に応じて修正する必要があります。むしろ、教科書の例示を基に、子どもたち自身が相手や話題、形式を検討することで、明確な相手意識・目的意識をもつことができるでしょう。

### 2. 読むこと

文学的な文章、説明的な文章にかかわらず、読むことの学習における紙面の大半は教材の提示です。だからこそ読むことの学習では、『教師用指導書』等を活用した教材研究が必要です。学習活動や学び方への理解に必要な情報が、手引きページに集約されています。手引きページの情報に基づき、教材の特性をつかむことも教材研究の第一歩となるでしょう。

また、この紙面を教師と子どもたちが共有できる貴重な情報として活用することが求められます。



### 3. 言葉の特徴や使い方、言語文化

言葉の特徴や使い方にかかわる学習単元は、該当ページを読み進めることで学習活動が成立するような紙面構成になっている場合があります。学習内容がはっきり示されている反面、表面上の理解にとどまってしまうことも危惧されます。他の教科の学習や子どもたちの生活と関連づけながら言葉が使われる場面を想起させ、学習内容の定着を図りたいところです。

俳句や短歌のような言語文化の学習単元は、教材の提示のみの紙面になる場合があります。学習活動の例示や学習内容が明示されていない分、学習展開は教師の裁量に大きく委ねられていると言えるでしょう。

### 4. 情報端末との接続

教科書紙面にあるデジタルコンテンツへのリンクは、各教科書が用意するデジタルコンテンツに接続するものです。タブレット端末を使用して子どもたちが手で確認することになります。例えば、話し合いの学習単元に埋め込まれた実際の話し合い、俳句や短歌の学習単元に埋め込まれた朗読のような音声コンテンツは非常に有効なものです。



# 第4学年「ごんぎつね」

## 1. 授業の準備

### (1) 単元の目標と言語活動を確認しましょう。

手引きページには、リード文として、単元の目標が示されています。これは、教材を通して指導しやすい指導内容となっています。

「ごんぎつね」では、人物の気持ちの変化、人物の関係、情景といった内容が扱われる可能性があります。全てを網羅した学習を計画するのか、いずれかの内容に焦点化するのか、子どもたちの実態に応じた単元の目標の設定が求められます。その際、モデル紙面の「ポイント」のような、教材の特性に応じて示されている学習用語や読解方略を学ぶ機会も確保する必要があります。

また、例示された言語活動についても、単元の目標を達成する効果的なものとなるように、工夫する必要があります。

### (2) 毎時の問いを見通しましょう。

手引きページに例示された毎時の問い(学習課題)は、子どもたちに提示できる形に検討しましょう。

②「「ごん」の気持ちを想像しよう。」は、具体的にどのような場面・行動・会話を扱うのか、考えるために必要な叙述はなにか、といった点で工夫の余地があります。目標に向かって、子どもたちが考えやすい問い方を用意しましょう。

### (3) 作品に対する子どもたちの解釈を想定しましょう。

教材研究によって、作品理解の要となる内容を整理し、授業によって形成される子どもたちの解釈の幅を想定します。

「ごん」がつぐないを行う理由や「兵十」への想いは、ひとりぼっちという「ごん」の境遇が大きくかかわります。手引きページに例示された個々の問いは、場面

- ③ 情景や場面の様子が想像しやすい表現を見つけてみましょう。そして、その表現にはどんな特ちょうがあるのか、友達と話し合みましょう。
- ④ 友達と話し合って、分かったことや気付いたことをもとに、物語や人物についての考えをまとめましょう。

**ポイント**  
人物や物語に対する考えを深める

- ・ 行動や気持ちを表す言葉とともに、情景からも登場人物の気持ちを想像する。
- ・ 場面と場面を、結びついたりくらべたりして、気持ちの変化をとらえる。
- ・ 他の人の考えや、自分とはちがう見方を知ると、物語に対する考えを深めることができる。

**自己評価**  
子ども自身の振り返りを促しています。

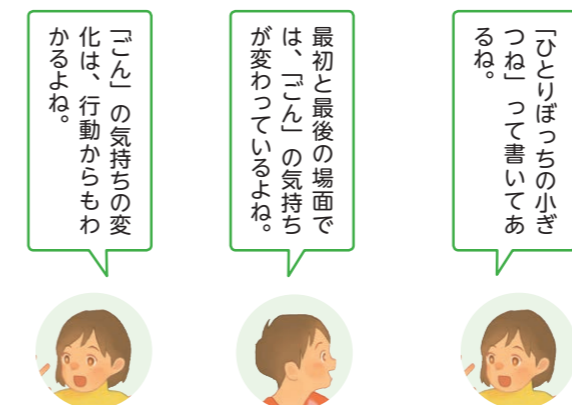
**読みの力の明示**  
教科書に示された言葉は、読みの力として蓄積しやすいものになっています。

## 学習のてびき

### 気持ちの変化を読み、考えたことを話し合おう

- 気持ちを表す言葉や情景のえがかれ方に気をつけましょう。
- 物語について話し合い、考えを深めましょう。

- ① 文章全体を見通そう。
  - ・ 「ごん」はどんなきつねですか。
  - ・ 「1」から「6」までの場面に題を付けましょう。
- ② 「ごん」の気持ちを想像しよう。
  - ・ 場面ごとの「ごん」の気持ちを想像し、話し合みましょう。
  - ・ 「ごん」の兵十に対する気持ちはどこでどのように変わりますか。



**単元の目標**  
年間指導計画、子どもの実態に応じて設定します。

**活動例**  
学習活動や問いを、子どもと共有し、学習を進めることができます。イラストの吹き出しやノート記入例等も、どのように生かすのか、検討する必要があります。

の部分的なものにとどまることもあります。だからこそ、最終的には、子どもたちの解釈が、作品全体の中で一貫性をもったものになるように、積み重ねられる解釈の関連性を意識した学習計画が求められます。

## 2. 授業中

### ○本時の問いにかかわる叙述と子どもたちの発言を関連づけましょう。

読みの学習は、叙述を基にした検討が大前提になります。しかし、単に問いに対する子どもたちの考えの根拠となる叙述を示せばよいわけではありません。

②「「ごん」の兵十に対する気持ちはどこでどのようにかわりましたか。」に対して、「ちよっ、あんないたずらをしなけりやよかった。」という叙述を挙げ、いたずらを後悔していたと発言する子どもがいます。教師は、このような単純な結び付きに、他の子どもの発言や叙述を組み込み、板書を使って叙述の関連を表す役割を担っています。前後の叙述の関連はもちろんのこと、場面を越えた内容を結び付けることによって作品全体の内容理解の機会をつくることができます。

このような内容の読み取りに際して、読み方を明示的に扱うことが重要です。会話と行動から想像される人物の心情、視点人物の心情があらわれる情景描写、設定部・終末部から考える作品構造といったものです。

## 3. まとめ

毎時のまとめは、子どもたちの問いに対する考えが、話し合いや全体共有といった問いの検討を経て、再考されたものになります。教師は、ここでの再考した子どもたちの考えに対して、本時のねらいに沿ったものになっているのか、評価する必要があります。

## 第4学年 考えたことを文章に書こう

### 1. 授業の準備

#### (1) 単元の目標を確認しましょう。

書くことの学習は、取材・選材、構成、記述、推敲、共有という一般的な文章作成過程を経ることになります。これは、学習指導要領の指導事項の枠組みとも言えます。つまり、学年や学習内容にかかわらず、いつも同じような学習活動になってしまう可能性が高いということになります。そして、教科書紙面も同様の指摘ができます。

ここでは、「**組み立てを考えて**」という構成に重点をおいた学習展開が想定されていますが、「**くわしく調べて、整理しよう**」といった選材の段階にもモデル紙面ではふれています。当然、このようなページの前には、テーマの設定や取材にかかわる紙面もあります。

だからこそ、単元では書く過程のどこにかかわる学習内容が重点となるのか、判断しておく必要があります。

#### (2) 単元の活動を見通しましょう。

学習活動によって作られる文章は、どのような文種であっても、相手意識・目的意識が重要になります。

モデル紙面には「友達に」とあり、最も身近な読み手を設定しています。読み手を学級内に設定する場合は、最も効率的に文章をやりとりすることができます。ただし、他の学級や学年、保護者や地域の方と、読み手を学級外へ求めれば、書き手の意欲を高める効果もあります。

また、なんのために書くのか、という目的は文章内容そのものに影響し、「分かりやすく伝えるように」という目標を具体的にするものになります。

#### (3) 想定文を設定しましょう。

この単元で、子どもたちはどのような文章を書くのか。当然、教師はこれを想定した文章を事前に作成しておく必要があります。想定文は、学習計画の妥当性を示すものであり、単元の評価にも直結するでしょう。

教科書紙面には、モデル文が示されています。これを想定文とすることも考えられますが、多くの場合、子どもたちの実態あるいは学習展開に合わないものとなります。その理由は、先述したように相手意識・目的意識は各学級で設定されるからです。

**エアバックランドセル**

西田 あきと

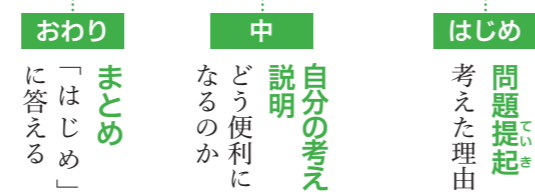
登下校中の小学生が事にあうというニュースを聞くことがあります。なくなってしまう子どももいて、とても悲しいことだと思っています。運転手が安全に運転するのは、あたりまえのことですが、子どもたちを守るものがほしいと思いました。

そこで、ぼくは、エアバックがついたランドセルを考えました。

このランドセルには、車についているようなエアバックがついています。ランドセルに強い力がくわると、自動でふくらむがふくらみ、子どもの体を守るのです。登下校の時、もしも、車がぶつかってくるようなことがあっても、せおっているランドセルが大きなケガから子どもを守ってくれます。

このように、エアバックランドセルがあれば、子どもたちが安全に通学することができると思います。

表をもとに文章を書こう。



おわり	中	はじめ
まとめ	便利になる ところ	よくしたいと 思ったところ
・エアバックランドセルがあれば、安全に通学できる。	・車がぶつかってきた時、自動で働く。 ・ランドセルから袋が出てきて体を守る。	・小学生が登下校中、安全に通学できるようにしたい。 ・いつももっているものをいかしたい。 ・子どもの体を守りたい。

組み立てを考えて、表にまとめよう。  
(組み立て表)

- くわしく調べて、整理しよう。
- 考えたことについてくわしく調べ、分かったことを書きだします。
- 友達に分かりやすく伝えるように、書くことを選びましょう。

### 2. 授業中

#### 全体で共有できる学習場面をつくりましょう。

書くことは、個人的な作業です。これは教室内でも変わりませんが、書くことの学習を個人的なもので終わらせてはなりません。

そのために、情報の整理の方法や構成のイメージとなる教科書に示されている図表を活かすことができます。これらの図表は、書くことの過程にある活動例ですが、それ以上に共有の教材となります。

「組み立て表」は、初め・中・終わりに書く内容を整理したものです。これは、子どもたちが同様の活動の見本となる側面と基本的な構成の形を確認する側面、そして、書く内容の適否を考える側面をもっています。

授業では、組み立て表に列挙された内容とされなかった内容を取り上げ、「分かりやすく伝えるように」という観点から検討する機会をつくります。その後、自分自身の選材した内容を確認しながら、組み立て表を作成していきます。例示された教材があるからこそ、構成にかかわる課題が共有され、自身の組み立て表の作成について子どもたち同士で助言し合う状況が生まれます。

### 3. まとめ

文章を書くことは、言語活動のゴールになります。設定された読み手に応じて清書することもありますが、重要なことは体裁を整えることではありません。ここで子どもたちには、改めて目的に沿った文章になっているか、推敲する姿勢が求められます。

また、目的とする文章が書きあがった後には、個々の内容的な面白さだけでなく、学んだことが文章に表れているか、確認する機会が必要です。教科書のモデル文や組み立て表を、自身のものと比較することで、文章の形式にかかわる学習を振り返ることができるでしょう。文章の内容と形式は、いずれも学習の成果として扱うべきものです。